

## 研究における挑み方(生き方)と知見は連動している。ただしその内的関係は語りえない。示していこう！

松本光太郎  
(名古屋大学)

### 私のやってきたこと

大きく括れば、高齢者を取り巻く生活世界を知ることが私の行ってきたことです。これまで具体的に行ってきた研究としては、一つに「在宅高齢者の外出」という事象に注目してきました。もう一つは、「施設に居住する高齢者に日々訪れる行為や体験の機会」ということに注目をしてきました。

### 「在宅高齢者の外出」という事象に注目

今日は、私の研究の大きな方向性を定めた「在宅高齢者の外出」という事象に注目した研究に関して重点をおいてお話したいと思います。

この研究を始めたのは、論文的にはいろいろ書きましたが、実際は私の祖母の生活が始まりでした。祖母は、祖父が亡くなって、母、つまり私にとって祖祖母と一緒に長年熊本で生活をしていました。その後、祖祖母が亡くなったことを契機に、娘家族、つまり私たちの住む福岡へ63歳の時に越してきました。同居ではなく、近くのマンションに住んでいました。祖母はまだ若く元気だったこともあり、特に勉強に関してはうるさく、まだ中高生であった私にとってはなんとも疎ましい存在でした。

そんなことを(疎ましいと)私は思っていたのですが、祖母は徐々に生活の基盤を熊本から福岡へと移しながら、70代、80代と年を取っていきます。その過程で、私がなんとなく気にかけていたのは祖母の「お付き合い」でした。「お付き合い」というのはいろいろあって、年賀状を贈りあうお付き合い、お歳暮・お中元を贈りあうお付き合い、時折電話を掛け合うお付き合い、定期的に訪問しあうお付き合い、冠婚葬祭のときだけ顔を合わせるお付き合い、常日頃顔を合わせるお付き合い、街中で出会えば会釈を交わすお付き合い、何

かあれば駆けつけてくれるお付き合い、まあ様々な類のお付き合いがあります。

祖母を見ていると、元々熊本を基盤に生活していた人ですから、お付き合いの多くは熊本に残っていました。ただそれでも時間とともに、相手が亡くなったり祖母自身元気がなくなったり気持ちが離れていったり、とにかく熊本でのお付き合いは減っていきます。定期的に熊本を訪問する機会が減っていったように思えました。一方、徐々に公民館などを通して、福岡にわずかばかりですが友人といえる人も出来てきました。ただそれでも、多くの方は長年福岡に住み続け、地縁の濃い方ばかりです。年をとって、すでに複雑に根を張っているコミュニティに入っていくのは、そう簡単ではなかったように思います。ちょっと話をはしょりますが、この根の張れなさは晩年デイサービスへ通うことで少し変化はありましたが、昨年祖母が亡くなるまで続いていたように思います。

さて、根を張れないというのはちょっと抽象的な表現ですが、具体的なことで言うと、「行く場所」があまりなかったように思います。祖母は公民館へ行って、いくつかの教室に通ったりもしていましたが、やはり限られている。そして、研究の関連で高齢の方の話を聞いていると、行く場所が限られているのは、祖母に限ったことではないようでした。もちろん、高齢者以外の方がたくさん行く場所を持っているかということ、そんなことはないように思いますが、それでも可能性として行く場所が増えていくことは高齢の方においては望めないように思います。

### 「同行調査」へと行き着いた経緯

これらの見立ては、私個人のわずかばかりの経験に則ったものでしたから、もう少ししていねいに見ていこうと思い、修士論文では外出に関するアンケート調査、インタビュー調査、追跡調査、同行調査と行いました。もちろん、こんなにやっていたのでは時間が足りませんから、まあ留年のような形になりました（実際は、修了はさせてもらえましたが、博士課程に上げてもらえず修士論文の書き直しが課せられました）。

私の研究の問いは、漠然としていて、ゆっくり洗練させていきます。現時点での Research Question (以下、RQ) は、「私には外出することは大事だと思えるのだが、なぜ大事なのだろうか」といったものです。そして、「外出時に何が起きているのか」という課題を明らかにしようとしてきました。

アンケート、インタビューで分かったことも一旦まとめたのですが、「外出時に何が起きているのか」という問いに迫るために、実際外出しているところを見たいと思い、ある

方をお願いして外出に追跡させてもらいました。追跡とは、刑事さんが尾行するような感じでした。違うのは、「尾行しています」と事前に伝えていることだけ。やってみて気づいたのですが、遠くから見ていると、彼女が何をみているのかとか、どんなことに気持ちを向けているのかとかあまり分からないのです。また、途中で彼女の方から「後ろからついて来られて気持ち悪い」と率直に言われて、その後は一緒に歩いて目的地へ行き彼女の自宅まで帰りました。追跡調査はこの時一度だけやって、その後はしませんでした。

次に、一緒に歩くなかで彼/彼女に起こっていることを理解していく同行調査というのを始めるのですが、追跡調査から同行調査へと移行する過程で、私にはすごく迷いがありました。実際、大学院の指導の先生とこの調査(同行調査)をするかしないかで、言い争いのような状態にもなりました。要は、私は——客観主義的な——相手に影響を与えていないかのような観察にこだわっていました。

あの当時、フィールドワーク時に調査協力者と2000年問題の話をよくしていましたから、2000年になりつつある時期だったと思います。今となっては、観察者の存在事態が事象の一アスペクト(一側面、要素間が切れている一要素ではなく)であると言えますし、そのような理解も多少の了解をされてきていますが、あの当時観察者と事象との関係について私にとってはまだまだ混沌とした理解でしたし、客観主義的な観察者のポジションを捨てて事象の中に飛び込んでいく大胆さも傲慢さも持ち合わせていませんでした。

それでも、同行調査を“結果的”に始めたのは、消去法、つまりそれ以外の方法で「外出時に何が起こっているのか」という問いに答えようがなかったからです。

綾小路きみまろが「潜伏期間30年」と言いますが、私も潜伏期間が約5年続きました。同行調査を結果的に選択しやってみたものの、どう論文に書けばいいのか分かりませんでしたし、少し言葉にすることが出来るようになった今から考えても、同行調査という方法論を位置づけることはそう簡単ではなかったように思います(未だに同行調査を位置づけていないのが実状です)。

その5年間は、周りにいた先輩方と読書会をして、先輩方にいろいろ質問をして応えてもらうという問答のようなことをしていました。例えば、言語ゲームとは何かとか、構成主義とは何かとか、可能世界とは何かとか。ちなみに、私に付き合ってくくださった優秀な先輩方は、いまだに潜伏期間中です。私のような愚鈍じゃないと、シャバではやってられないのだと思います。

## 「挑み方(生き方)と知見は連動している」か? : 「包含」という言葉を軸に

さて、このワークショップは「フィールドワーク」に関するものですので、同行調査で見出した知見は限定して紹介します。

ここで「研究における挑み方(生き方)と知見は連動している」という話をします。

私は外出に同行し高齢者の外出を理解する上で、「包含 (Implication and Inclusion)」という言葉を持しました。この言葉は、高齢者の外出時に何が起きているのかというRQに応えるものでもありましたし、同行調査という方法を位置づけるものでもありました。

### 一「包含」という言葉を軸に「外出」について考える

「包含」という言葉を軸にして、こんな事象を理解してみます。

三浦さん(仮称)と私は、散歩がてら市街地へ向かっている道中、川にかかっている柳橋という小さな橋を渡っていた。その渡っていた最中に三浦さんは「昔は車が通るくらい広がったんだよ」「以前はいつも浮輪をもってきて泳いでいた。からきし泳げなかったんだよ。肝が小さくてね」と、この橋にまつわる三浦さん自身の経験を私に話す。

この時に、回想法の研究者だったら「1回想」が生起したとカウントするのかもしれませんが(冗談です)、私は今・ここで起こったこの発話・行為をどのように理解すればいいのか考えました。

「彼は過去の話をしている」

「しかし、その過去の話は、あくまでもこの場所に立つことにより、この周りの環境に取り囲まれることにより、生まれたものであった」

「つまりこの発話・行為自体、今・ここで生成したものである」

「しかし、この今・この発話・行為の生成は、過去の出来事がなければありえなかっただろう」

こういった諸々のことを考えるわけです。

言葉を少し変えると、

「今・ここでの体験は経験に支えられている」

「経験が今・この体験に浸み込んでいる」

「今・ここでの体験が生成するのは、この場所に立ち、この環境に取り囲まれているか

らである」

「経験は、この場所、この環境に潜んでいる」

「そして、我々はこの場所に立ち、この環境に取り囲まれることにより、経験に出会うという体験を享受するのだ」と。

ここでいう経験とは、いわゆる過去の出来事という実在を指しているわけではありません。あくまでも体験が生成することにおいて、経験が潜在していたことが明らかになるという理解です。

「包含」という言葉の「包む」という言葉は2つの側面を持っています。1つは、環境や場所に私たちは常時包まれているという側面です。2つ目は、行為が実現し体験が生成する場面では、私たちを包んでいた環境・場所と対峙することになります。地が図になると考えていただければいいと思います。地であった環境や場所が図になり、つまり対峙するようになり、その対峙する環境や場所を私たちは包み込む。「包む」とは常時環境や場所に包まれている我々が、行為が実現し体験が生成する場面において、環境や場所を包み込むことを表しています。

次に、「包含」という言葉の「含む」という言葉についてです。これは経験のことを指しています。対峙する環境や場所を包み込む作用は、体験が経験化すると言い換えることが出来ます。また、人は常時環境や場所に包まれていることから、人と環境とは系を成していると考えます（ここで、「人が」「環境が」といった主体理解を一旦置いておきます）。経験はその系に含意していくと考えると、系に含意するする経験を下敷きにして、新たに環境や場所を包むという体験、言い換えると、新たに系において経験化していく作用が生まれます。すでに述べましたが、経験とは、行為が実現し体験が生成することにおいて潜在していたということが明らかになります。

ちょっと入り組んだ議論です（こなれていないせいでもあります）。

高齢者の外出に同行して、なぜ外出することが大切であると私には思われるのか明らかにしようとしてきていました。

外出時には、「包含」の作用が起こる機会、上記で示したエピソードのような出会いの機会が豊かに潜在しているように思えます。そして外出する機会を失うこと、もしくは「包含」の機会を失うということは、「私」を形づくる経験の総体の脆弱化、もしくは「私」を取り巻く意味世界の空疎化が起こってしまう、というのが大まかな見解です。

なぜ、外には「包含」の機会が豊かにあると言えるのかという疑問は残りますし、また包含と忘却との関係を述べていないため、議論が完結していませんが、とにかく「包含」という言葉を軸に、なぜ外出することが大切であると思われるのか、その理由を議論していきました。

### －「包含」という言葉を軸に「同行調査」について考える

「包含」という言葉は、同行調査が外出という事象を理解する上でそれなりにしっかりとした方法であることも下支えしてくれます（「方法の理解」と「知見の創出」はどちらが先かは分かりません。「人の行い」という点において、「同行調査という方法の理解」も「外出することの意味の創出」も同じ土俵に乗るはずだと考えます）。

同行調査では、一緒に歩いている時はメモを取りませんし、会話を録音することもあります。ましてやビデオに撮ることもありません。同行調査を行っていた初期に、調査協力者に写真を撮っていいかと尋ねてみたのですが、どうも気分が乗らない反応でした。私としては写真を撮って資料を残したい気持ちのもう一方で、ただ一緒に外出をしたいと思っていましたので、写真を撮ることにこだわる気持ちはありませんでした。

「記録はしなかったのか」と思うかもしれません。メモは、調査協力者と外出を終え、彼/彼女らが帰宅した後、1人で改めて外出コースを2～3回巡りました。夕方外出をしたり、長時間外出される方もいらっしゃるので、夜中までメモをとるために、外出コースを巡っていたこともありました。フィールドノーツはその後に帰って作成します。

この方法に対して、外出時に彼/彼女らに訪れた行為や体験を、後に私が記述するわけですから、そこには時間差による乖離があるのではないかという指摘がなされました。それに対して、私はその場所を巡って、その場所でメモを取ったことが重要ではないかと考えました。つまり、先ほどの「包含」という作用を思い出してほしいのですが、私はその場所を訪れて、その場所に立ち環境に取り囲まれてメモをとるのです。ある場所に立つと、ふと「あ～！こんなことがあったな～」と何かが思い出されることはないでしょうか。その場所に立ち環境に取り囲まれることにより、私と環境との系に含意していた経験を下地に、体験が訪れてくるのです。たしかに、論理的にはあの時の出来事とは違います。しかし、この場所に立つことにより、この環境に取り囲まれることにより、あの時の経験がよみがえってくることはあるように思います。そのような体験を記述するのが同行調査だと考えています。

蛇足ですが、私たちの今・ここの体験は常に過ぎ去っていきます。せいぜい「あの時こうしとけばな〜」とか、「あの時どう思っていたのだろう」とか、事後的に他者から振り返ることを求められる場合に限って、経験を体験としてつかもうとすることはあるように思います。もしくは、先ほどから述べたように、その場所に立つことにより、環境に取り囲まれることにより、経験が体験として訪れてくることはあるように思います。

つまり、当人においても体験そのものをつかむということは、論理的に出来ないということになります。そういった意味で、当人において今・ここでやっていることを克明に記述することは、他者、特に同行者しか出来ないのではないかと考えています。

以上のように、「包含」という言葉を軸として、「外出することの意味の創出」と「同行調査という方法の理解」を行ってきました。

## 同行調査の先

さて、特別養護老人ホームで長期にわたりフィールドワークを行った話は、時間の関係上今日は話せませんが、その研究における「同伴」という方法は、同行調査とは違った形で方法と知見が連動しています。

(後日、特別養護老人ホームでのフィールドワークに関する3編の論文が公刊されました。機会があれば読んでみてください。松本光太郎 なぜ古野さんのコーヒーを飲む姿に僕は魅了されたのか? : 映画「ジョゼと虎と魚たち」を導きの糸にしなごら 『発達』Vol.109 ミネルヴァ書房 pp78-89 2007; 松本光太郎 施設に居住する高齢者の日常体験を描き出す試み: 外へ出て一内に帰ることに注目して 質的心理学研究 Vol.7 pp77-97 2007; 松本光太郎 人間・植物関係における質的研究の意義と可能性 人間・植物関係学会雑誌 Vol.6(2) pp7-17 2007)

## 狭義の「科学的」を内破出来たら・・・

まとめに入っていきたいと思います。先日、ある研究会で M. P. Lawton という方を引き合いに出して、こんな話をしました。

Lawton さんは、高齢者と環境との関係に関して先駆的に多くの研究を行った方です。その方が「人の内部と外部は原理的に不可分であり、人と環境は一体的なシステム(unified system)を形成している。けれども、実践的な(heuristic)目的のためにそれらを離して語る必要があり、測定を試みる必要がある」(Lawton, 1998)と述べています。

Lawton さんは、一昨年亡くなられたそうですが、約 30 年間ずっと原則「人と環境は不

可分だ」と述べつつ、研究実践としては人と環境を分けて環境を人が評価したり、人の行動への環境の効果を測定してきています。

この Lawton さんの態度はよく分かるんです。ありがちな質問として、「これは科学的なのか？」と問われた時、エビデンス（証拠）を示さなければならない。そうしないと雑誌論文は載せてくれない。そこで、多くの研究において人と環境物との相互作用が起こった後、ある時点で切りとった評価や効果の測定を行っている。

しかしこの偏った科学観が、先日の研究会の冒頭に示した「恋愛というものを歌ってはいるが、恋愛そのものを歌っていない」科学へと貶めているように思えます。

この時に、ある先生から「人は言うこととやることが違うものなのだからいいじゃないか」というコメントをいただきました。そのコメントに対しては、「違う」ということが許容されるならば科学研究というものは何を指すものなのか、もしくは言うこととやることの違うことが許容されるとはどういった事態なのか考える必要があるのではないかと思います。

### カッコいいロックンロールは語りえない＝面白い研究は語りえない

偉そうに言う立場ではありませんが、質的研究というものが市民権を得始めたように思えるなかで、私としては少し不満があります。それは、グランデッドセオリーとか、KJ法とか、「言語データを扱えば」とか、ある定式に乗っかれば質的研究という認識が感じられるからです。

今回のタイトルは、荒川さんと相談してつけたのですが、もし質的研究にオリジナリティがあるのならば、それは量的研究と対置されるものではなく、理解したい事象に対峙する中で私なりのフィールドワークを行い、その事象と方法に関して徹底的に思考することにあるのではないかと思います。大きく括れば「 」入れの作業、例えば松嶋研究であれば「非行少年」「会話分析」、大倉研究であれば「アイデンティティ」「語り合い」、松本研究であれば「高齢者の生活」「外出」「同行調査」といったことを問い直す営みであったように思います。

統計解析は、現状では方法ありきという方法の先行が起こっている点(方法により事象が見えてくるということは当然あるが、あまりにも偏重している)と、少なくとも現状では事象に即して新たに方法を作り出すという方向性を辿りにくい点に問題があるように思えます。数と言語の問題は一旦置いておきます。

今回のタイトル、転がり続けるとは英語で言うと、ローリング、私の大好きなローリングストーンズにあやかってつけたのですが、ロールし続けることこそ学問（学び問う）において大事なのではないかと考えています。今日参加されている村上さんと私で「ロックンロール心理学会」というものを地下に潜ってやっています。冗談半分本気半分なのですが・・・ロックンロールは語るものではなく示すもののように思います。ある一瞬の邂逅といえますか、閃光といえますか、今・ここであなたと私の中に何かの実る時ロックンロールが実現しているのだと思います。

どうすればロックンロールは実現するのか、僕らはどうすれば(一瞬でも)ロックンローラーになれるのか。「その一瞬に行き着くまでの軌跡」と「ロックンロールが実現すること」との内的な関係を語ること、さらにはその内的関係をマニュアル化することは原則出来ないのだと私は考えています。僕らに出来るのは、松嶋さんや大倉さんのような面白い研究をしている、つまりロールし続ける存在に同舟しながら(真似をしたり、乗り越えようとして)、僕らもロールし続け示し続けることではないのかと考えています。

### 共変する「挑み方(生き方)と知見」

「研究における挑み方(生き方)と知見は連動している。ただしその内的関係は語れない。示していこう！」とはじめに本話題提供のテーマとして掲げました。研究への挑み方は、その人の生き方をそのまま写し出しているという人もいます。私も半ばそう思っています。そして、研究への挑み方は、研究において見出された知見とかなりの部分連動しているように思います。

挑み方は生き方を反映している。挑み方が知見に連動している。この不可分さをどう考えるのか。

ひょっとしたら、挑み方が知見に連動しているなら、フィールドワークとは研究者が持ち込んでいる枠組みに当てはめているだけではないかという指摘がありえると思います。しかしその場においてとる方法は、アприオリなものではなく、常に現場において改変していくものです。つまり、アприオリな方法に知見を当てはめていくという一方的な関係ではなく、知見が方法を変えていくし、さらには挑み方(生き方)を否応なく変えていくのだと思います。私の挑み方(生き方)は少なからず付き合いってきた/付き合い合っている高齢者から受け取ったものですし、私はその環から抜けられないのではないかと考えています。